

労働者の歴史(上)

(2)

労働者の歴史調査会・ワタリ

ニュース寸評(愛媛地区新緑山慰霊祭)

(3)

ヤジ馬

労働者運動調査①・阿蘇城編

(11)

中国哲世

笠ヶ崎手帳(1)・笠ヶ崎・笠ヶ崎に消えた派出所

(17)

寺倉政雄

資料・第一次笠ヶ崎運動(その一・笠ヶ崎編)

(19)

岩田隆一

※ 表紙のバックの「腰区立てるな……」というの口
笠ヶ崎内のメシ屋、のみ屋に、「町を明るくする金
」がはり出したもの、左下に「町を明るくする金」
という字が入っている。写真で約1/4に縮小した。

笠ヶ崎の歴史

(上)

労働者の歴史調査会・ワタリ

会はじめに「労働者」とは何か

笠ヶ崎では一般に労働者が自分のことをいう
場合、一番多いのが「アニコ」であり、二番目
が「労働者」だろう。「日雇労働者」なんてい
うのは日雇は左翼的な人々しか使わない。横濱
の町では「人足」というのが一番多い。「山包
」はよく知らない。

左翼的な人々の中には「労働者」という
表現を使っている人々もいる。だが同じ労働者の
労働者でも職人は「アニコ」とか「人足」とか
いわない。むしろアニコを罵るにする傾向すら
ある。

また「日雇い」というのも雇われ方の分け方
であり、どういう労働者なのかはつきりしない。
「下層労働者」にいたっては誰のことだかぞの
つとごまかせるつごうのよい言葉として使われ

ている。

最初、俺はこの歴史を調べ、始める頃は、「
労働者」は差別用語であり、「日雇労働者」と
いう言葉を言うべきであると思っていたのだ。
「日雇」ということを中絶にして調べた。
ところが、江戸時代には日雇という土方より
も、あらゆる形の雇役(雇役の手伝など)が行
なされていたのがわかってきて、「日雇」というの
は本質ではないことがわかってきた。

次に、では「土方」ということと、建設業の
歴史を調べていくと、いつの時代も建設アーム
があるわけではなく、建設といった、その専門は
いつも大仕事があるわけではなく、その専門では
メシがくえない。また、城や庭は農民の出稼ぎ
労働(強制的)であるのか多いし、わが祖先は
どこにいたのかからなくなってしまう。

建設の歴史には職人のことしか書かれていな
い。むしろは何物であるかわからなくて職人の
中にわしらかかいとあるかと思ひ、大工、左官、
瓦のことはよく書かれているので一生懸命読ん

(3)

「人足」の型と云う本が出てゐることを知り、この本を全てがわかるかと思つたが、結局、彼の知りた人夫、人足の事はほとんど書かれていなかった。

こうしたことなどから、僕たちは一任「なんだろうかし」何れなのだろうかしと考へてみると、どう呼ばれてゐるか、いつてゐるか、ということから考へてみることにした。「ヘアンコ、人足、人夫、立ちんめ、風太郎、日雇、新着者……」そして、今までこれらを総称してマスコミへた面、テレビ、ラジオで使われて来たものが「新着者」である。おそらく、新着者という言葉をいちはんさんでいると思われろので「新着者」という言葉にこだわつてみる。

さて「新着者」とは何か？

土方でもあり、工場で働く雇合もある、港で働く時もある、日雇の時もある、飯場へ契約の時もあるし、季節雇もある、一生どっかの名をへいくかもしれない「通行はこれに近い」ようにするに「いろいろ」あつて、殆どどれでもなく、一息言までは「新着者」でいいわい

ないだろうか。「新着者」の語源は、昭和一の年頃から使われたということしか今はいえない。それ以前は新着者という言葉はない。

最近の新聞は「〇〇作業員」という表現をつかっている。これは大手の工場でホワイトカラー、族を「事務員」「職員」と呼び、現場労働者を「作業員」「工員」と呼んでゐることから、えらんだと見られる。この表現へ作業員はちやもう大手工場では使わなくなつて、本工は管理労働とびつたので事務員と区別せず全て「社員」と呼び、実際に現場労働をする社外工を作業員と呼んでゐるから、レッキとした差別へ資本家による区別、言葉である。しかし、今問題にしているのは言葉ではなく、どういう仕事をしているか、なので本題にもどらう。

さて、「新着者」へしんどくて、汚れる、あつた、安くて、不安定な、単純肉体的労働をする人々の歴史を書いてみよう。なお、この文章、本書は個人で仕事の片手間に調べたもので、多くの誤りを犯している可能性がある。誤りに気付いた方、知つてゐる人は遠慮なく其

④

たこともある。

日雇という契約方法にオ一の特徴があるので、はやく、仕事の種類で分けられることもできないとすると、あらゆる産業にわたりへ大小はある。やはり建設が多い。契約方法から「臨時」でありへ日雇、飯場、期間、直行、半常雇、日雇、月給などや出来高払いが多い。仕事内容が、単純な肉体的労働へこれにしんどくて、汚れて、あつたという条件がたいてい一つ以上くつてゐる。雇する人々を総称して「新着者」と呼んでゐるようだ。ようだと云うのは、新着者をひいて「新着者に仕事する人、肉体的労働をする人」としかりてないし、現実に使われている新着者との区別などを考へた結果である。

「新着者」が差別用語として言葉の問題として争うと運動がおかしくなつてくる。単に言葉を変へればすむ問題ではない。

しんどくて、汚れる、あつた、不安定な単純肉体的労働が差別されている（馬鹿にされている）ことに同意があり、どういふ仕組みに、てゐる運本主義社会に問題があるのじや

別、指摘して下さい。

へい、新着者の仕事は誰がしなれたか

昔は新着者という言葉はなかった。

東武時代当時は、豊原へ天皇、皇族と商人、學者へ坊さんなど中回廊と豊原の奴隷、農民だけだった。小さな家は農民自身の手で作られ、豊原の家や大工事は、朝鮮や中国から来た「留学生」も含む技術者、当時は坊さん、の下に「農民」がかり出されて土方となつて行なわれた。これは朝鮮労働、その後、後援労働と云われた。これは天化の改新へ六四五年で差別化され、平民へ不良も平安京へ京都へも大寺院も、皆もこの方まで作られた。

一、こうした経緯で、強制労働や重役をのがれるために多くの人々が逃げだした。こうした人々は当時始めて作られた戸籍「庶民」を賜けたため、在り所として同様のものでもない。河原にばかり住みついた。こうして庶民の階級の、庶民は多くの人が住みつき、その日暮しのため、金に困るとは仕事でもやつた。へい……

⑤

種設計書にわたりに出て金をもらう、町内会に金をもらつて掃除をする、動物の屍体の処理など人の成るゝ汚れる仕事や力仕事、又は町内会を走して金をもらう（取寄役のはじまり）、行商人へてきやの始まり、また電空騎の石座や銀圓騎の座も設計は坊さんた水工事はこの人々がやった）

これらの人々は富がないから「非人」と呼ばれ、住んでいる所から「河原者」とも呼ばれた。この中で定着的・生産的労働（動物の屍体処理・皮革加工や竹細工、草履作りなど）をする人が「雇多」と呼ばれるようになり、代々受け継がれる世襲的なものとなった。「これに相反し別部落の始まりといわれる」一方、流動的・不安定な労働（町人の儀役労働のかわりに人足仕事に出て金をもらったり、その時その時の仕事を探して働く日雇人足）が「非人」となっていたようだ。というのは學者さんもまたハッキリ断定してはいないので。

↑ ココにハナズ

なお同じ出生でも「河原乞食」は江戸時代以後全く別な道をたどっていく。この辺のことは

め、出世を夢みて土地を離れ都へ、財へと求め込み、大部分は手浪者となり、それが新しく起こつた富貴のやゝをへ仕事求めて流れ込み、馬車や富貴、富貴人足、新貴人足となつた。こうした人足仕事は、仕事はきつい力仕事だが、例の建屋も同く、信用も技術もないから、土肥を考われ、借金や重税に苦しむ農民がほとんど流れ込んでいた。

細田信要はこうしたことを見て、今まで山に作つていた城を平野に作り、農村に住んでいた武士や商人、職人を城の四りに集めて住ませ、城下町を作つた。彼はそうする事によつて近代の富貴の力を導入し、商人、職人を集めることによつて経済を発達させ、その富貴自分の物とする。その事なリ「富貴強兵」を行なつた。

吾吉はさらにこの武士、職人、商人と農民の分離をおし進め、武器を持ち自衛し、反抗し始めた農民から力を取り上げ（刀狩り）、新貴族の混乱によつてメチャクチャとなつた身分階級を整理するため彼れを行ない兵農分離をおし進めた。

小沢田一著曰私口河原乞食考に詳しい。

へ正々職業としての労働者の発生

技術が進み、米の生産や他の生産が増えたと
思ふた當の争奪戦が始まり、斗うことを懸念と
する武士が生まれた。武士の売身はそれまでの
貴族、僧侶、農民という関係をおちこわし、一
層多くの浮浪者、職業屋、非人を生み出した。
室町時代も末期とばると富の増大は一層進んで
全国を統一して支配する勢力がつつみ、戦国
統一、戦国時代となった。

こうした中で、生産の増大は商品の増加を生みだし、商品の増加はより広い販売先を求めて交通を発達し、新しい宿場町や港を生み出していった。この宿場町や港の農民宿、人足宿が本宿へドヤの始まりのようだ。

戰國時代になると古い身分關係はくずれてし
ぎい、下克上の風潮が盛まつた。戰國時代の終
了、土地を荒れ家を焼かれた農民は仕事も求
非人は生活が不安定なため、あまり家族をも
てない。

親近の郡市の多くはこのころ出来たものである。たとえばへ時代順へ大和郡山へ赤松へ加賀金沢へ備前利家へ大和郡山へ赤松へ近江八幡へ赤松へ安芸広島へ毛利輝元へ江戸へ家康へ全日本起へ蒲生氏郷へ備前岡山へ宇喜多氏家へ甲府へ赤松氏政へ仙台へ伊達政宗へ越前福井へ越前氏政へ肥後豊後へ加藤清政へ伊予松山へ加藤嘉明へ赤松へ能登へ越前郡中へ家康へ尾張名古屋へ徳川幕府へなどである。

全善寺建設支那恩成会の啓願紙「大阪城」
はこの頃の人足の稀薄を感^んじてつけられた題名
だったはずだ。『一掃功成り、万善和る』を引
用し「大阪城は大吉が作ったのではない、我々
の賛と賛った人足たちの血と汗の結果である」
その空みを怠^りてはならない」と面^めかされた。
またたくその重りである。しかし、今の全善寺
はこの初心を怠^りているのではないだろうか。

八五 人夫出しの突生とやくざ

家國は吾々のやうた話下加作りによる真面目
新實業論、工業行政をう士業工商の協力

これ等の打ちこわしの中心は日雇やで、ちや
行商人、年寄者だつたのを、幕内は寛政二年へ一
七九〇の石川島に人足部屋を作り、貧窮者を収
容し、養生のために、技術を傳はせようとした
が結局、人の操縦るしんとい仕事へ押入れや土

いつの時代にも非人は再生産されて増大して
いった。エタと重い、出生による再生産はな
くて、マキンや經濟的不況によつて落ち込む人
間の数にまじりとして非人部落が存在してゐる
現在は経済的身分制こそどりのぞかれ、非人とい
う身分はないが、相変わらず山谷、釜ヶ崎は世
のほみだし者とされ、一方しんどくて、汚れる

評寸スニヨ

今の笠ヶ崎は江戸時代蔵田へ大正の中頃まで
この蔵だったようだ。いつ、なぜ、蔵田になっ
たかまだ知らないと呼べれ非人部落だった。

なお、調べた資料は、誰でも手に入るようなものしか引用していない。図書館にいかなければ見れない資料に拘してはあつて、文献資料一覽として発表します。

以上、前掲通り

果して何時から始まるのやら、ウロウロ。もちろん、この日は
 どう形式でやるのやら、わからぬままに、ともかくアリと
 出かけて見たが、まず、その肥田料に田中角栄の天皇はんでも
 御列席なさるのか、と一顧慮をせよ。ような警備隊が目に付いた。
 南海線沿いの道端に御座る宮が、埋うしごものがシツクラレ、果
 五、六人。公園の内には池がある。白の幕をうれ、テントが一張り